第16回 全国校区・小地域 福祉活動サミット at オンライン

異文化や多様な価値観と共に生きていく知恵

2025年
2/15(土)
10:00〜15:20

コロナ禍が少し落ち着きを見せ、全国各地で地域福祉活動が再開し始めていました。そうしたなか能登半島で大規模な災害が起き、今もなお多くの方が避難生活を送っています。私たちがコロナ禍や被災地の状況から学ぶことは、地域には、日常生活を送る上で欠かすことのできないお互いに気にかけあうつながりや温かな支えが欠かせないこと、とくに厳しい状況下では住民の皆さんが創意工夫をして、人とひととのつながりを途切れさせない取り組みが大切だということでした。

一方で、コロナ禍においては、感染への不安や恐れから差別が容易に生まれ、周囲と異なる生活習慣や考え・文化を持つ人への偏見や排除につながることを知りました。また、被災地では、住みなれた土地を離れざるを得なくなる人が多く、少子高齢化、過疎化が一気に進む状況が突き付けられています。生活の場を移すことで、これまでつむいできたつながりを失って孤立する人が出る一方で、被災地に残って厳しい生活をしながら地域コミュニティの再生をめざし、復興活動に取り組んでいます。

地域共生社会を実現するためには、地域に住む人たちが自らの手で、世代間の価値観の違いや外国人、移住者、生きづらさを抱えながらも多様な生き方を選択する人たち等の生活習慣や文化、価値観の違いに対する差別や偏見を乗り越え、ともに生きていくための取り組みを進めていく必要があります。

昨年度は、能登半島地震発災の直後ということから中止とした本サミットですが、本年度は、オンラインで気軽に全国の活動者（自らの手で自分たちの住みやすい地域づくりをすすめる）の皆さんがつながりあいながら、元気になり、また、災害に立ち向かい、次の活動のステップとなることを目的として開催します。

開催方法・参加方法

・参加対象：小地域福祉活動に関心のある方どなたでも
・Zoomを使ったオンライン開催
・参加方法：個人またはグループ参加
※グループ参加：市町村単位、または任意のグループ単位で、集合形式でサテライト会場を設置し、参加することができます。各会場内での意見交換をすることをおすすめします。
※DVD作成は行いませんので、ご了承ください。後日アーカイブを作成し、視聴用URLをお知らせいたします。

参加費

①個人		3,000 円
②グループ単位　（同一施設・敷地）		
1カ所につき	10人以下	20,000円
	11人以上20人以下	30,000円
	21人以上30人以下	40,000円
	31人以上40人以下	50,000円
	41人以上	60,000円

※同一施設・敷地内で、お申し込みの人数以内であれば、会場を複数設営することは可能です。同一市区町村内であっても同一施設・敷地以外の場合は、別に（複数）お申し込みください。

開催日時

2025年2月15日（金）10:00-15:20

申込方法

下記のURLもしくは右記QRコードよりお申し込みをお願いします。
https://www.clc-japan.com/events/detail/6663

参加方法

2025年2月12日（水）にご登録のメールアドレス宛にZoom入室URL等の情報と当日資料をご案内します。
当日はネット環境をご自身で整えてご参加ください。

申込締切

2025年2月7日（金）
※やむをえずキャンセルをされる場合は、2月12日（水）15:00までにお知らせください。所定の手数料を差し引いた金額を返金いたします。それ以降はキャンセルや変更はお受けできませんのでご注意ください。

主催　第16回全国校区・小地域福祉活動サミット実行委員会

共催　小地域福祉活動を楽しむ全国ネットワーク
（代表：牧里毎治　関西学院大学 名誉教授）

後援（予定）　社会福祉法人全国社会福祉協議会

＊大会公式WEB上で常時最新情報をお届けします。
お問い合わせとして多く寄せられる質問と回答も掲載していますのでご覧ください。
https://www.shouhuku.com/answer

お問い合わせ

サミット事務局
特定非営利活動法人　全国コミュニティライフサポートセンター（CLC）
〒981-0932　宮城県仙台市青葉区木町16-30 シンエイ木町ビル1階
TEL：022-727-8731　FAX:022-727-8737
Mail　action@clc-japan.com
大会WEB　https://www.shouhuku.com

開催内容（プログラム）

10:00　開会挨拶・オリエンテーション
10:10　基調ディスカッション『異文化や多様な価値観と共に生きていく知恵』
10:35　休憩（移動）
10:40　分科会パート1（分科会1・分科会2）
12:10　昼食休憩（移動）
13:10　分科会パート2（分科会3・分科会4）
14:40　休憩（移動）
14:50　各分科会報告とまとめ（15:20終了）
助言者　室田信一（東京都立大学 准教授）

基調ディスカッション

10:10〜10:35

池田 昌弘
全国コミュニティライフサポートセンター
理事長

牧里 毎治
関西学院大学 名誉教授

分科会 1　10:40〜12:10

子ども、子育て家庭の居場所づくり、つながりづくり

～子どもたちが活躍する居場所づくり～

2020年からコロナによる影響を受けて、孤立した子育て環境や制限された学校生活から不登校の問題をはじめ、児童虐待、子どもの貧困、ヤングケアラーなど子ども自身とその世帯の問題が注目されています。また、全国各地では災害が相次いで発生するなど、様々な生活上の困難に直面しています。このような状況のなか、地域ではイベント・行事等が激減し、子どもが地域とつながれる機会がより少なくなりました。そんな中、子ども食堂や学習支援などは、地域での仲間づくり、つながりづくりのベースとなる活動として多様な形態で展開されています。

この分科会では、学校と地域住民（ボランティア）が子どもや子育て家庭とともに、家でもなく、学校でもない第三の居場所において、子どもたちが安全で安心して過ごすことはもちろん、楽しく過ごしながら、子どもたちが活躍できる居場所づくりについて、また子どもと子育て家庭へのこれからの支援について、皆さんといっしょに考える場とします。（担当実行委員　江部直美、山本信也）

事例発表

①駄菓子屋ハッピー（奈良県川西町）
家じゃない、学校でもない第3の居場所として、空き家をリノベーションした"コミュニティスペース　ハッピー"のオーナーのご協力のもと、毎週水曜日14時〜17時に活動。駄菓子を購入した小学生が、立ち寄った地域の中学生や大学生に宿題を見てもらうことも。近所の高齢者との交流も生まれています。

②「ほっとるうむ」と「ほっとるうむplus」（山形県山形市）
ほっとるうむ」は、不登校や教室に入れない児童・保護者が立ち寄り、悩み等を相談できる居場所として、毎週火曜日の午前、小学校の相談室で運営しています。「ほっとるうむplus」は、小学校での活動をベースにしながら地域の方々がつながりあえる居場所として、地域のコミュニティセンターで月1回運営しています。

コーディネーター　山本信也（宝塚市社会福祉協議会）

分科会 2　10:40〜12:10

移住者と受け入れ地域の向き合い方を考える

～移住は異なる価値観の相互理解～

人口減少が止まらない地方において、地域活性化の期待がかかっているのが移住者です。
コロナ禍において大都市部から地方への流出が進んだとの報告もあります。
しかしながら、移住者と受け入れ側の地域住民との間で生活習慣や価値観がぶつかり、トラブルが起きる例も少なくありません。移住者が望む暮らしと、迎え入れる地域の期待の双方がともにハッピーになるための考え方やメソッドはあるのでしょうか。
本分科会では、移住者側、受け入れる側それぞれの立場から声を聞き、よりよい向き合い方について考えます。
（担当実行委員　高橋良太、徳弘博国）

事例発表

①〈移住希望者と地域をマッチングする立場から〉
NPO法人いなかみ 理事長 近藤純司（高知県香美市）
"いなかみ"は、「移住定住交流センター」を運営し、行政や関係機関と連携しながら移住希望者の要望に添った細やかな対応をしています。また、移住後の丁寧な個別支援や、地域と移住者がふれあうためのイベントなども積極的に行っています。

②〈地方に移住した生活者の立場から〉
佐和田地区民生児童委員　長谷川浩章（新潟県佐渡市）
移住した理由や、移住前のイメージと実際移住した後のギャップ、感動エピソード。そして、移住先地域に対して自分が"貢献できている"と思うこと、移住先地域からの期待に応えられていないと感じていること、移住者を受け入れる地域側に知っておいていただきたいことなどをお話しします。

コーディネーター　高橋良太（全国社会福祉協議会）

分科会 3　13:10〜14:40

孤立を防ぎ、新たなつながりを生み出す〝場〟とは

～多様な主体がつながるつどいの場・サロンの可能性を考える～

3年のコロナ禍を経て，ようやく日常が戻りつつある一方，令和6年元日の能登半島地震により北陸地方に暮らす人々にとっては，今もなお日常とはほど遠い日々が続いています。コロナ禍や被災により様々な制限を受け，活動が停滞してしまったり，つながりが弱まってしまったりしている地域が少なからずあります。またそうした状況下では，これまで出会うことが少なかった若年層や外国籍，子どもたちなど、平時から地域の中で意識されにくい人たちが孤立する可能性があることを痛感しました。
厳しい状況下でも人々のつながりを切らさず,また新たなつながりを生み出すためには,普段から知恵と工夫で孤立を防ぐ取り組みを展開することが必要とされています。
この分科会では，そうした取り組みを共有するとともに，単なる「場所」という機能に留まらない可能性を探り，多世代・多様な主体がつながるサロンやつどいの場の可能性について考えます。（担当実行委員　古市こずえ、秋山詩織）

事例発表

①NPO法人とかの元気村（高知県佐川町）
住民らで構成する地縁型NPO。運営する「あったかふれあいセンター」での常設型サロンには、高齢男性を中心とした多くの住民が気軽に訪れ、見守りネットワークや得意分野で活躍する大事な人材となっています。生きづらさを抱えた方がこの常設型サロンから新たなつながりをつくれた例も。

②こころの居場所"ぱるのにわ"（新潟県新潟市）
住民有志によるNPO法人が地縁組織に参画し、空き店舗を活用した喫茶店を開設。認知症や精神疾患のある方、独居の高齢者など、さまざまな住民が集い、コーヒーを飲みながら相談し合える関係性が生まれ、"お互いさま"のつながりを大切にしています。「ぱるのにわ」をきっかけに専門機関につながった例も。

コメンテーター　古市こずえ（東海村社会福祉協議会）
コーディネーター　秋山詩織（新潟市南区社会福祉協議会）

分科会 4　13:10〜14:40

コロナ禍で見えてきた課題と地域がどう向き合うか

～ヤングケアラー・外国にルーツのある子どもたちを地域で支える～

コロナ禍はこれまでの地域活動で見えなかった様々な課題を見ることになりました。
特に子供・若年性の孤立や外国人の課題が改めて顕著になりました。また、不登校は過去最高になり外国にルーツのある子供たちも増えています。
この分科会ではコロナ禍で見えてきた若者支援(外国ルーツの人を含む)に小地域がどのようにアプローチしていくのかを共に考えていきます。（担当実行委員　栗林知絵子、勝部麗子）

問題提起

①豊中市社会福祉協議会校区福祉委員会、多文化共生福祉委員のみなさん（大阪府）
コロナ禍地域で見えてきた子どもの貧困、外国にルーツのある子どもたち等への取り組みから地域課題をみんなで共有します。

パネルディスカッション

②NPO法人豊島子どもWAKUWAKUネットワーク
代表　栗林知絵子（東京都豊島区）
プレイパークや中学校の不登校支援・子どものショートステイなど目の前の子どもたちを支える仕組みを地域のネットワークで作っていきますが、今回はヤングケアラーの若者や多文化共生も含めた子育て支援について学びます。

③豊田市保見団地 NPO トルシーダ（愛知県）
トルシーダはポルトガル語で応援という意味です。誰もが当たり前に学べ、機械が広がり、夢や希望が持てる社会をめざし、保見団地(公営住宅)のブラジル人の移住者とともにつくる子育て支援やコミュニティを学びます。

コメンテーター　牧里毎治（小地域福祉活動を楽しむ全国ネットワーク）
コーディネーター　勝部麗子（豊中市社会福祉協議会）